

## ニコライ・ネフスキーの伊良部調査

上原孝三

### 1, 旅の目的— 学問の方法としての旅

1912 (明治 45) 年東京を旅立ち、パリへ向かう一人の女性がいた。その女性は新橋駅を出発し、敦賀を目ざした。敦賀でロシア船アリヨリ号に乗り込んだ。ウラジオストク經由シベリア鉄道の長い旅路を行くのは、歌人と謝野晶子。晶子は夫鉄幹に呼ばれ、パリに向かうのだが、当時 33 歳 7 人の子供の母でもあった。晶子はロシア語はもとより外国語が話せない。女一人の孤独かつ勇敢な旅であった。晶子の旅のルートはネフスキーのその逆を辿ったのだろうか。

ネフスキーの宮古行き (大正 11) は、柳田国男・折口信夫の沖縄旅行と無関係ではない。柳田国男は 1919 (大正 8) 年貴族院書記長官の職を辞し、学問のための旅を意識的に試みるようになった。翌年 (大正 9) には日本各地を旅行することを条件に朝日新聞社に入社し、早速東北地方を旅行する。そのまま中部・関西地方まで足を延ばし、年末には沖縄に向け出発する。大正 10 年に沖縄を一巡し、伊波普猷とも会う。先島の宮古・石垣まで至り、日本最西端の与那国まで行く。それから那覇に戻り、更に奄美諸島を巡り、鹿児島に到着するのである。前後二ヶ月に及ぶ旅行であった。これらの旅が、柳田民俗学の基盤になったことは周知の事実である。

折口信夫は柳田に沖縄行きを誘われるが、事情があり断っている。帰京後の柳田の旅の話に刺激を受けた折口は、1921 (大正 10) 年夏に沖縄・壱岐探訪の旅を行い、1923 (大正 12) 年に再度の沖縄探訪旅行を行っている。

1921 年の旅で折口が訪ねた地は、沖縄本島とその周辺離島が中心であった。沖縄本島では沖縄の歴史・民俗・宗教の上で重要な土地は訪れた。北は辺戸岬から南は喜屋武岬まで、離島では久高島・津堅島に及んでいる。折口の旅の目的は、沖縄の歴史・民俗・宗教の上で重要な地を訪れることと、できるだけノロと会うことにあった。つまり、沖縄の民俗信仰宗教の概要を知ることにあつたといってもよい。「琉球の宗教」「沖縄に存する我が古代信仰の残存」はその旅の報告である。

柳田と折口の旅の仕方は対照的である。柳田の旅がたいていは人力車や馬を雇っているのに対し、折口の旅は徒歩によるそれだった。柳田は「海南小記」の旅で宮古も訪れているが、平良から下地までの距離を馬で往復している。

折口は大正 10 年の旅で、沖縄の人も滅多に行かない沖縄北部の「ヤンバル」の国頭村を徒歩で一周している。折口も宮古を訪れているが、その詳細については不明。

柳田をめぐる若い研究者としての折口とネフスキーは親交があり、折口はネフスキーのために、『万葉集』や『源氏物語』を講じている。そのネフスキーが、折口の「をちみづ」（変若水）についての考えに異議を唱えた。『万葉集』に「をちみづ」を詠んだ歌があるが、「をちみづ」は人間を若返らせる霊力を持つ水であり、その考えは帰化人がもたらした神仙思想に基づいていると折口は『万葉集辞典』に述べた。

その折口の考えに対し、ネフスキーは大正 11 年の宮古調査で得た資料「アガリヤニザ」の神話や方言の「すでいみづ」を例証に、「をちみづ」は日本固有の民間信仰に基づく思想ではないかと反論したのである。このネフスキーの批判が折口の再度の沖縄探訪という旅につながっていく。

大正 12 年の沖縄再度の旅で得た折口の最大の収穫が、「まれびと論」であることはあまりにも有名だ。柳田の「海南小記」の旅の指摘で沖縄の来訪神に留意していた折口は、八重山登野城の盆行事「アングマ」を実見し、来訪する「神」を目の当たりにした。また、同じく八重山川平のマユンガナシ、宮良の赤マタ・黒マタなどの事例で、来訪神に関する考察を深める事が出来た。

柳田・折口・ネフスキーの三者に共通する思考は、辺境の地に古い文化が残っているという考え方である。沖縄・宮古・八重山に残存する古代。彼らの学問の旅は、古代日本へ向かっての旅だった。

日本民俗学はその初期の段階で、地方の言語や民俗事象・民間伝承・民間信仰などを資料として活用し、これまで顧みられなかった民衆の歴史や生活の実態を解明していこうと意図・企画していた。だがその当時、学問のために地方に趣き、調査するのは世間一般にはなじみがなかった。

だからこそ、遙か遠いロシアからはるばるやって来たネフスキーが、沖縄のさらなる地方である宮古方言をわざわざ調べる事に地元宮古では違和感・不審感があった。ロシア人・外国人という物珍しさも手伝っただろうが、宮古方言や民間伝承を調べる価値があるのかという疑問は、下地馨をはじめとする宮古の知識人だけでなく庶民が訝しがるのも不思議ではなかった。

外来者、つまりネフスキーだけではなく、田島利三郎、伊波普猷などの影響もあり、富盛寛卓、上運天（稲村）賢敷、慶世村恒仁、下地馨、島尻勝太郎などの宮古地元の人が宮古の言語・歴史・文化を考えるようになった。

柳田・折口は日本民俗学で大きな役割を果たした。沖縄・宮古・八重山は彼らの学問の発



想の地になった。つまり、沖縄・宮古・八重山は日本民俗学からいってみれば、いわば「聖地」なのである。しかし、柳田・折口両人の旅は直接的に宮古に影響を与えなかった。柳田・折口両人は実際に現地を訪れ、聞き書きもするが、彼らは自分の直感を信じ、何らかの着想を得ようとする。ネフスキーは、科学的な手段・方法を基にフィールドワークを行う。ネフスキーの旅は質が違う。

## 2, ニコライ・ネフスキーの生涯をめぐって

加藤九祚は、『月と不死』(注①)の「解説—ニコライ・ネフスキーの生涯」を基本にしつつ、その内容を大幅に書き変えた。それが『天の蛇—ニコライ・ネフスキーの生涯』(注②)である。書名に見える「天の蛇」とは、宮古方言で「虹」を意味する「ティンヌパウ」を直訳したもの。本のタイトル名は、ネフスキーがいかに宮古方言や民俗信仰に惹かれていたかを証左するものである。

本のサブタイトルにもあるように、加藤九祚はネフスキーの生涯や研究業績を長年追及している。ネフスキーの研究は、日本のオシラ様研究、アイヌ語とアイヌ文学の研究、宮古諸島の民俗や言語の研究、西夏語の研究、台湾曹族の言語研究とその領域は多岐に亘る。ネフスキーの学問的興味は幅広かった。

ニコライ・A・ネフスキー(1892~1973)は生涯に亘り三回宮古を訪問し調査している。宮古各地において、ネフスキーは直接インフォーマント(情報提供者)に会い、自分の目・耳で様々なものを見聞・確認・記録した。行く先々で、方言・歌謡・土地の習慣を尋ねて、記録を重ねたのである。表記はローマ字を元にした国際音声表記であった。その研究資料が現在まで残されているがその資料的価値は高い。

ネフスキーの生涯や研究を追及するにおいて、宮古諸島の民俗信仰や言語の研究を無視・欠落するわけにはいかない。宮古がネフスキーの学問的関心の軌跡のなかに占める位置は、大変大きなものがある。加藤はそのことを痛感していた。だから、1975年8月に宮古へ追跡の旅に出た。

加藤九祚は、ネフスキーが宮古で直接交流を持った人々に会い、ネフスキーの足取りの確認を試みた。8月の日付は不明だが、加藤は実際に伊良部島の佐和田に行き、宮古島の狩俣・島尻・西原も訪ねている。

伊良部島の渡口港を写し、佐和田では国仲寛徒(1873~1929)の住居跡を訪ね、「国仲寛徒頌徳碑」も写真に収めた。佐良浜の漁港とスーニ(サバニ)も写した。狩俣部落内の風景写真も1葉掲載されているが、それはかつての公民館付近から狩俣遠見台を眺望したもので

ある。

加藤は1922年夏8月のネフスキーの宮古での足取りをなぞった。ネフスキーが歩いた道・部落・島などを見聞き写真に収めたのである。撮影者は加藤九祥その人である。このことが彼の意識を如実に物語っているのではないか。

『月と不死』には、宮古関係の写真は1葉もない。『天の蛇—ニコライ・ネフスキーの生涯』の中には約30葉の写真が収録されている。そのうち宮古関係の人物写真が2葉、宮古の風景写真6葉、都合8葉収められている(注③)。

さて、人物写真であるが、2葉の内1葉は稲村賢敷(1894~1978)と島尻勝太郎(1912~1984)のツーショット。写真の背景の風景は那覇市小録の宇栄原団地である。稲村は晩年そこに住んでいた。もう1葉は、下地馨と島尻勝太郎のそれである。写真の背景は不明だが、下地はネクタイ姿で映り、島尻は右手に写真機(カメラ)をぶら下げている。

詳細な経緯は不明だが、加藤は島尻をパイロットにして、稲村と下地に会えるよう依頼し同行を求めたと思われる(注④)。

加藤は稲村に会いネフスキーとの思い出を聴くことができた。稲村との初対面の印象を、「八二歳という高齢にもかかわらず、記憶力といい、体力といい、少なくとも十歳は若いように思われた」(注⑤)と加藤は述べている。ネフスキーが関心を抱いている宮古島の方言やアーク(歌)が、「外国人の研究者にとってさえそんなに価値のあるものであったのか」と稲村は自分の故郷宮古を見なおす契機になったと述懐している。そして、50年前のネフスキーについて、「たいへんな語学の天才」との認識を披露している。

ネフスキーとの邂逅が、稲村賢敷の宮古・沖縄の研究に繋がっていくのか否か、その真偽のほどは不明だが、後年彼はネフスキーと歩んだ地を再び巡り、宮古歌謡に関する卓越した知識を獲得していく。そして、その知識に乗っかって独自の説を提起していく。

### 3、加藤九祥の宮古調査と人々の証言

加藤はネフスキーが宮古で出会った人々に面会したかったのであろう。とりわけ上運天(稲村)賢敷にあいたかった。ネフスキーの第1回の宮古調査のパートナー・同伴者ともいうべき上運天(稲村)賢敷の存在が気になった。

ネフスキーの宮古への案内者・上運天(稲村)賢敷が生存しているのか否か、生存しているにせよその所在は確認できなかった。宮古に行く前に、富盛寛卓・慶世村恒任が物故していたことは認識していた。予想したことであろうが、国仲寛徒・狩俣吉蔵・本村恵康も既に逝去していたことを宮古での旅で知った。



ネフスキーが交流を持った人が物故していた場合、加藤はその関係者にも直接会い、ネフスキーの宮古での調査研究や足取りを丹念に描きだしている。

『天の蛇—ニコライ・ネフスキーの生涯』の「あとがき」には、加藤が直接面会して話を聴いたり、電話や手紙などで連絡をとった人々を五十音順に列挙している。その中から宮古関係者をピックアップすると以下ようになる。ネフスキーが宮古で直接交流を持った主なインフォーマント・地域と加藤が宮古などで話を聴いた関係者にまとめた（注⑥）。

ネフスキー — 稲村賢敷・富盛寛卓・国仲寛徒・慶世村恒任・狩俣吉蔵・本村恵康・  
下地馨  
富盛寛卓（宮古島・平良） — 慶世村恒任・下地馨・島尻勝太郎・宮国定徳  
国仲寛徒（伊良部島・佐和田） — 国仲穂水・大川恵良  
狩俣吉蔵（宮古島・狩俣） — 上地太郎  
本村恵康（宮古島・西原） — 本村メガ・仲間弘雅（注⑦）  
稲村賢敷 — 下地馨・島尻勝太郎・宮国定徳

加藤は宮古での聞き取り調査の段階で、ネフスキーを知っている稲村賢敷・下地馨の両者が生存していることを偶々知った。加藤は、上運天が稲村に改姓したことを知ったのもこの旅のことだったと思われる。

加藤は稲村賢敷と下地馨の兩人に是非とも会いインタビューしたかった。何故ならロシア人ニコライ・ネフスキーと直に交流を持った人物だったからである。

稲村・下地は当時沖縄に住んでいた。ここで、島尻勝太郎の存在が浮上する。誰なのかは不明だが、島尻に仲介の労を取った宮古在の人物がいた。稲村・下地・島尻の3人はいずれも宮古出身者で宮古歴史研究の先輩・後輩の関係にある。

加藤は「幸運にも 1975 年 8 月 17 日、興南高等学校長島尻勝太郎の案内」（注⑧）で稲村に会いネフスキーとの思い出を聴くことができた、と述懐している。日時は不明だが、おそらく同時期であろう、加藤は島尻に案内され下地に接触し、ネフスキーとの出会いを聴いた。これは、加藤にとって予想もしなかった大きな収穫であった。

1975 年の旅で、「幸運にも 1975 年 8 月 17 日」に稲村に会えた。加藤は宮古訪問と下地馨と会った日付は記していないが、稲村に会った月日を明記している。この違いは明瞭である。稲村はネフスキーの宮古調査の内容を知る唯一ともいえる生き証人だったからである。加藤の「幸運にも」という言葉には彼の万感の思いがこもっている。加藤にとって島尻は、稲村・下地に接触できた実ありがたい存在だった（注⑨）。先述の写真がそのことを物語って

いよう。

ネフスキーは宮古にいく前に上運天(稲村)賢敷をインフォーマントにして、宮古の方言・伝説・歌謡等の予備調査を行った。ネフスキーと最初に交流を持った宮古出身者は稲村賢敷であった。稲村は当時上運天と名乗り、沖縄の師範学校を卒業し教員を数年務めた後、東京高等師範学校に入学したのである。上運天は28歳、ネフスキーが30歳、兩人とも妻帯者だった。

「宮古島に古代日本の言語が残っており、かねてよりこの地にあこがれていた」(注⑩)ネフスキーを伴い、稲村が故郷宮古に帰郷したのは1922(大正11)年の夏だった。

ネフスキーは稲村をパイロットにして宮古各地で民俗信仰、言語、歌謡などの調査・研究を行う。調査地点は宮古島の西里・狩俣・島尻・西原、伊良部島の伊良部・仲地・長浜・佐和田・佐良浜、多良間の仲筋・塩川などであった。だが、どういうわけかネフスキーと稲村は宮古島の砂川・新里・宮国などの南部地域には足を運んでいない。

調査の協力者・インフォーマントは稲村をはじめとして、富盛寛卓・慶世村恒任・国仲寛徒・狩俣吉蔵・本村恵康など宮古各地を代表する錚々たるメンバーであった。これらの人物はその土地では知識人であり有力な教育者・政治家などであったが、土地の有識者達はその地域独特の慣習・伝統・文化を守っていた。

稲村はネフスキーに同行していたわけだから、当然彼の調査方法を具に見ていた。稲村はネフスキーの案内者であったが、同時にインフォーマントでもあり、ネフスキーの疑問とする民俗信仰や方言を共通語(日本語)へ翻訳する人でもあったはずである。

宮古というフィールドで、情報提供者を挟み、日本語や宮古方言を操る異国人と稲村が対座し、民俗信仰や慣習、生業・行事・方言などの質問をする。奇妙な光景である。ネフスキーと稲村の眼差しが交差する。たしかに共感・同調・協調や助け合いは見られた。

しかし、一方では感覚のズレや認識の隔たりが苛立ちを生じさせ、見えにくい形ではあれ言語化を憚る、何かしら釈然としない違和感が二人の根底に流れていたのではないか。ネフスキーに対する畏敬の念はあれ、葛藤と対時の構図が密かに流れ沈んでいたように思われる。隠された裏面。明らかにネフスキーと稲村のスタンスは異なっていた。

確かにどれだけ日本語や宮古方言など語学に習熟したところで、ネフスキーのような外来者によって柳田国男のいうその土地・郷土の「心意伝承」の理解に到るまでは至難の業であろう。まして、1か月という調査期間では無理というものである。だが、柳田を感じさせたネフスキーの宮古方言・宮古歌謡研究の業績は、彼の民俗採集をめぐる方法意識に積み重ねられたものである。

だが、稲村にしても異国人に郷土研究を任せるのではなく、自分が育った宮古の歴史、民



俗信仰、方言を自らの発意によって調査研究するという段階にまで辿らなかった。とはいえ、稲村のネフスキーを見る目は他の宮古人とは異なっている。これは稲村とネフスキーの付き合いの長さ因る。他の宮古人にとって、ネフスキーは一過性の旅人であり、異国人という「まれびと」であった。この認識の違いは大きい。「まれびと」であるネフスキーは宮古で歓待された。彼の3回に及ぶ宮古調査はそれにも関係がある。

ネフスキーと稲村は少なくとも表面的には協調関係にあった。稲村はネフスキーの宮古研究に背中合わせに寄り添いながらも一方では学び、最後には決別した。そして、その四半世紀後にネフスキーとは異なる方法で宮古研究に大きく舵を切った。戦後に宮古研究に踏み切った稲村にネフスキーの影響を見つけるのは難しい。

宮古の各地の人物とネフスキーとを結びつけたのは結果的には稲村である。従って、ネフスキーの宮古研究を語る際、稲村の存在は大きいと指摘せざるを得ない。

宮古方言研究開始時期と予備調査期間に関するネフスキーの記録と稲村の記憶は必ずしも一致しないが、少なくとも1922年夏8月の調査の協力者・インフォーマントを確でき、ネフスキーの宮古での足取りを稲村の証言で裏づけることができた。

また稲村へのインタビューで、彼が伊良部島の調査へネフスキーに同行しなかった新たな事実も判明した。そして、現在知りうる限りの情報では、ネフスキーは宮古各地での情報提供者の氏名は記述しているが、同行した上運天（稲村）の名前は記していない。

ネフスキーは宮古での旅で、古代の日本を映す出す鏡のような特権的な聖地として宮古を発見した。沖縄の古層に眠る宮古。ネフスキーの聖地詣ではその後2回続いた。だが、宮古はネフスキーの最後の聖なる場所ではなかった。

稲村は加藤に語っていないが、少なくともネフスキーと一緒に歩いた宮古各地での調査は初めての経験だった。この経験は、稲村の後の研究に役だってくる。

ネフスキーを宮古に案内した稲村は、その後ネフスキーとの交渉は絶えてしまった。ネフスキーは慶世村には好意を抱いていたが、稲村については何も語っていない。ネフスキーとの没交渉について、稲村はその理由を加藤に説明していないし、加藤も敢えて聴こうとはしていない。加藤の関心の中心はやはりネフスキーだった。稲村は50年の沈黙を破りネフスキーのことを語ったが、その後も再び口を開くことはなく、文字化することもなかった。

#### 4、ネフスキーと慶世村恒任

稲村に代わって新たにネフスキーに接触したのは、慶世村恒任（1891～1929）である。慶世村はネフスキーに1歳上、稲村に3歳年長であるが、3人はほぼ同世代とみなしてよいだろう。ネフスキーは宮古に1926年に2度目の来島をなし、調査を行い研究成果を論文にしている。

慶世村はネフスキーの調査に協力している。慶世村はネフスキーにとって単なる民俗事象の情報提供者ではなかった。

慶世村は、宮古の歴史・民俗・歌謡を熱心に研究しており、『宮古五偉人伝』（1925年）、『宮古史伝』（1927年2月）、『註釈楽譜附 宮古民謡集 第一輯』（1927年12月）を出版している。『宮古史伝』と『註釈楽譜附 宮古民謡集 第一輯』（以下、『宮古民謡集』と略記する）の2冊の書物は、宮古の人による宮古歌謡研究の魁とも評すべきものである。

『宮古史伝』には34首、『宮古民謡集』には13首の歌謡がそれぞれ収載されている。近世文献からの引用を除き、その他の資料はすべて自らの調査成果である。慶世村は『宮古民謡集』の「例言」で、田島利三郎、伊波普猷、比嘉重徳、ネフスキーなどの宮古歌謡研究の先達者の名を挙げている。

即ち、宮古のアヤゴに関して、田島利三郎の『宮古島の歌』と題する歌謡集が1894（明治26・7）年ごろに成立したこと。伊波普猷が1909（明治42）年に「可憐なる八重山乙女」を新聞紙上に掲載したこと。比嘉重徳の「宮古の研究」があり、ネフスキーが「アヤゴの研究」を『民族』誌上に発表したことを述べている。

つまり、簡略ではあるが、慶世村は宮古のアヤゴ研究について研究史を辿っている。ここに慶世村の研究姿勢が見てとれる。この姿勢は稲村賢敷のそれとは対照的である。

慶世村は伊波普猷の「可憐なる八重山乙女」に触発され、1919（大正8）年『先島新聞』に与那国の鬼虎の娘に材をとった長編叙事詩「先島戦史哀歌・敗将の娘」を掲載している（注⑩）。

慶世村は伊波だけでなくネフスキーからも影響を受けている。たとえば、『宮古史伝』の「自序」の次に、「目黒盛豊見親が島鎮めのアヤゴ」がある。表記は全てひらがなであるが、「く°」「き°」といった特殊な表記がある。これは宮古方言の独特な音を表そうと工夫した慶世村なりの表記法である。「いう°さ」（戦）の左には、「i v s a」とあり、国際音声記号である。この表記法をネフスキーから学んだのは明らかである。

また、ネフスキーは1922年8月の伊良部調査の成果を、翌年の2月に京都大学史学会で「宮古島の結婚と祭礼」のタイトルで講演している。伊良部島のヌーシウタキ（乗瀬御嶽）



の祭礼「カムシュウリ」（現在の「カムス」・「カンムリ」）の報告をしている。カムス祭は旧暦10月から行われるので、聞き取り調査である。

続いて、「他に宮古島にはウジャム祭といふものもある。ウジャガムは親神の意にて」（注）とある。「ウジャム」「ウジャガム」は宮古方言のウヤガンであるが、宮古島のどの地点・地域の調査成果であるかは不明。いずれにせよ、ネフスキーはウヤガン（親神）祭の存在を把握していた。伊良部島から宮古島に戻り、ネフスキーが稲村にウヤガンのことを質問したのは想像に難くない。

『宮古史伝』の第4章の「第一節 御嶽と祭事」の中では、7つの祭祀を取り上げている。7祭祀の内5つは近世文献からの翻訳であるが、他の2祭祀は慶世村自身の調査による。即ち、「親神」と「シマフサラ」である。「親神」は「ウヤガン」のことである。

「親神」祭の調査は慶世村自身によるものであるが、ネフスキーの1926年の調査に協力していることから、彼からヒントを得たのかもしれない。「親神」祭の内容を具体的に報告したのは宮古の民俗研究では慶世村がはじめてである。

さて、『宮古のフォークロア』に多良で豊作になったらの「注釈」（126頁）がある。「この歌は、*ka ino : yo : z*『皆納祝』という祭りのときにも、*pacugacibud u l*『八月踊り』と呼ばれる奉納芸能のときにも歌われる。杵を手に八人が舞台に出て～中略一引用者～二人の男性が続く。／これで舞台は終わる。」とあることから、ネフスキーが多良間島の「八月踊り」を実見していることは確かである。

ネフスキーは1922年に多良間に渡っている。26年にも多良間に行ったかどうかは分からないが、彼は多良間島の「八月踊り」を実見していることを慶世村に語ったのだろう。慶世村はその影響で、亡くなる1年前1928（昭和3）年には、『沖縄宮古新聞』に「仲宗根豊見親組躍書」を18回連載している。「仲宗根豊見親組躍書」が、多良間島の「八月踊り」に材を採っているのは明らかである。

慶世村はこのように新しい知識を吸収しながら、それを自分の研究に取り入れ活用していることが分かる。ある意味慶世村にとってもネフスキーは「まれびと」だった。

## 5、ネフスキーの伊良部島での調査

いよいよ宮古離島でのフィールドワークの始まりである。ネフスキーは、『宮古島の歌』『宮古・八重山の歌』で筆写した歌も聴きたいが、筆写した歌とは別の歌も採集したいとの思いがあったはずである。

以下、『宮古のフォークロア』の記述を中心に、ネフスキーが調査した月日、地名（場所）、

インフォーマント名、歌のタイトル(ジャンル)の順で記す。( )内の数字は歌の数を示す。  
なお、『月と不死』『完本 天の蛇』も参考にした。

- 8月2日 平良、フガシュー 根間の主 (1首)
- 8月3日 平良、本村朝亮 タウガニ (7首)
- 8月4日 伊良部島渡航の船待ち(強い風が吹いているので伊良部島に渡島不可)。
- 8月5日 午後2時旅館へ運天が歌をよく知っている老人を伴ってやってくる。  
歌のタイトル不明。歌の記録なし。
- 8月6日 伊良部島国仲 ながびいだ(さーだながむつい)

さらに、ネフスキーは長浜の國仲寛徒宅で、寛徒の妻から「ダニメガヌアーク」の調査をしている。寛徒の妻はネフスキーが訪ねたときは、外出しておりその先から呼び戻されたのであった。固辞する寛徒の妻に対し、ネフスキーは執拗に要請している。遠路からの客ということで、寛徒の妻は諷い、ネフスキーは筆録した。

歌を聴き終えたネフスキーは、今の歌はこのような発音で宜しいでしょうか、と方言で発音し、居並ぶ者を驚愕させた。このエピソードはいまや「伝説化」している。ネフスキーの耳の良さと言語学者の優秀性を披露する挿話なのだが、ネフスキーの意図・目的は奈辺にあったか。

ネフスキーは、「宮古島の結婚と祭礼」で、伊良部島のヌーシウタキ(乗瀬御嶽)の祭礼「カムシュウリ」(現在の「カムス」・「カンムリ」)の報告をしているが、どこでその情報を収集しているのか不明のままである。いずれにせよ、ネフスキーの伊良部調査には情報が満載している。その背景には柳田の影響や『御嶽由来記』『琉球国由来記』などの文献捜査もあった。

ネフスキーは、宮古にやってくる前、日本各地を旅し調査もしている。1919年7月にネフスキーは青森県上北群天間林村の中村武志とオシラ様の研究で交流をしている。山形県東置賜群の佐藤与四郎ともやはりオシラ様の研究で意見を取り交わしている。つまり、ネフスキーの行為は、地元のことを地元の人に研究させるよう導いた(鶴見太郎『民俗学の熱き日々』)。宮古でも同様な手法を用いた。國仲寛徒や慶世村恒任はその好例であろう。



- 注① 『月と不死』 ネフスキー著 岡正雄編著 1971年 平凡社 東洋文庫 185
- 注② 加藤九祚 『天の蛇—ニコライ・ネフスキーの生涯』 1976年 河出書房新社。『天の蛇—ニコライ・ネフスキーの生涯』に「増補 ニコライ・ネフスキーと家族、その後の真相」を収録したものが、『完本 天の蛇—ニコライ・ネフスキーの生涯』(2011年 河出書房新社)である。
- 注③ 注②参照。
- 注④ 加藤は自分が会いたい人物については、宮古の人々の人的な繋がりを活用した。いわば芋鶴式な手法を採った。
- 注⑤ 注②の「あとがき」にある佐和田弘安と平良友助については不明。
- 注⑥ 注②の「あとがき」で加藤九祚は宮古での聞き取り調査の協力者の指名を列挙しているが、どのような経緯で誰に会ったのかということについて、一切触れていない。
- 例えば、加藤は西原出身の本村恵康のことを調べるに、本村恵康の長男の嫁である本村メガにインタビューを行っている。加藤が故本村恵康の住所・氏名も知らず、かつ一面識もない本村メガに会えるはずもない。
- 加藤の注②の「あとがき」をみると、「仲間弘雅」の氏名があるが、「仲間」がどこの出身でどのような協力をしたか明記されず不親切である。
- 「仲間弘雅」の氏名があることから、加藤は西原在の知名士「仲間」と連絡・接触を持ち、「仲間」の紹介・仲介で本村メガに会ったと考えられる。さらに細かいことを言えば、「仲間」は本村メガに自宅に招き、加藤の労を少なくしたと思われる。だが、誰が加藤に「仲間」を紹介したかは不明である(加藤に「仲間」を紹介した人は、おそらく宮国定徳であろう)。同様なことは、狩俣の上地太郎やその他の人々にも適用できる。
- 従って、注②の「あとがき」に見える宮古・沖縄の人々は、加藤に時間・労力だけでなく、かなりの情報も提供したことは安易に想像できる。
- 注⑦ 注②の 135～136 頁。
- 注⑧ 加藤九祚の旅は、宮古から沖縄への順序である。その逆ではない。もし、加藤が宮古へ行く前に沖縄で稲村と島尻に会っていたならば、1922年段階での稲村の存在・行動を知り、なおかつ稲村と島尻を結びつける人物に加藤が接触していなければならない。
- 注②の「あとがき」に名嘉順一の氏名が見える。名嘉と島尻は、「球陽研究会」の研究仲間だったが、名嘉は島尻に私淑していた。名嘉は島尻・加藤を自分の車に乗せ、稲村と下地の許に案内・同行したと思われる。
- 注⑨ 注②参照。
- 注⑩ 稲村賢敷とネフスキーの東京・大阪での交流については拙論「ニコライ・ネフスキーの宮古フォークロア研究」(『沖縄文化』 第47巻1号 2013年 沖縄化協会)を参照されたい。

注⑩ 仲程昌徳は「敗将の娘」(『琉球方言論叢』琉球方言論叢刊行委員会 1987年)の中で、慶世村の論文の紹介と分析を行っている。

注⑪ 注②参照。